

8 学校アクションプラン

令和3年度 富山高等学校アクションプラン -1-

重点項目	学習活動	
重点課題	家庭学習の充実(生徒)と教師の授業力向上	
現 状	<p>(1)本校では家庭学習時間を1日平均4時間以上(1週間で28時間以上)確保するよう指導しているが、目標を達成している生徒がいる一方、うまく学習時間が確保できない生徒も見受けられる。また、目標時間を確保しながらもなかなか学習効率が上がらず成績の向上に結びつかない生徒も見受けられる。</p> <p>(2)生徒の実態は年々変化しており、それと共にこれまでの講義形式の授業だけでは、生徒の主体性を十分に引き出すのが難しくなっている。教師は「学び合い」「ICTの活用」など、授業形態に工夫を凝らした、魅力ある授業を展開し、生徒の主体性の引き出しや学力のより一層の伸長を模索する必要がある。</p>	
達成目標	<p>〔家庭学習の充実〕</p> <p>①1・2年生の学習時間について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら計画した家庭学習時間を達成した生徒の割合70%以上 <p>②効率的な学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画的で効率的な学習ができるようになり、学習の総量が増える生徒の割合80%以上。 	<p>〔授業力向上〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学び合い」を行った授業の割合80%以上。 ・主体的に授業に参加した生徒の割合80%以上。
方 策	<ol style="list-style-type: none"> 1. 全体指導の強化に加え、担任および教科担当者による面接等を通して学習時間の確保に問題をかかえる生徒を重点的に指導する。 2. 時間の使い方について日頃から指導し、学習効率の向上に取り組ませるなど、学習の質を上げようとする意識を持たせる。 3. ICTの授業への活用については、その長所・短所を把握し、さらに効果的な利用法について研究を進める。 4. 各教科・科目において「学び合い」「ICTを活用した授業」等を計画的に設定し、生徒の主体性を引き出す。 5. 進路指導部と連携し、課題の質および量の適正化をはかる。また、学習計画が適切であるかや、学習方法が効率的で効果的なものであるかを担任および教科面接を通じて指導する。 	
達成度	<p>① 予習・復習を計画的に進められた生徒の割合</p> <p>1年 [7月] 予習58.6% 復習32.4% (3教科)</p> <p>1年 [12月] 予習69.3% 復習38.6% (3教科)</p> <p>2年 [7月] 予習35.3% 復習35.3% (5教科)</p> <p>2年 [12月] 予習31.4% 復習34.8% (5教科)</p> <p>3年 [7月] 予習39.5% 復習36.0% (5教科)</p> <p>3年 [12月] 予習57.5% 復習50.4% (5教科)</p> <p>②「1学期より計画的で効率的になった生徒」</p> <p>1年[1月] 75%(66%) 2年[1月] 74%(78%)</p> <p>「1日あたりの学習総量が増えた生徒」</p> <p>1年[1月] 63%(58%) 2年[1月] 59%(67%)</p> <p>※()内は昨年の数</p>	<p>①「学び合い」</p> <p>1年 [7月] 84%(74%) [12月] 90%(78%)</p> <p>2年 [7月] 76%(67%) [12月] 81%(82%)</p> <p>3年 [7月] 60%(80%) [12月] 68%(76%)</p> <p>②主体的に授業に参加</p> <p>1年 [7月] 83%(82%) [12月] 82%(81%)</p> <p>2年 [7月] 82%(82%) [12月] 81%(81%)</p> <p>3年 [7月] 83%(83%) [12月] 84%(83%)</p> <p>※()内は昨年の数、全校生徒対象</p>
具体的な取組状況	<ol style="list-style-type: none"> 1 担任による面接を年間5回以上行い、学習状況の把握、学習習慣や生活習慣の見直し・改善に向けたアドバイス等を行っている。 2 学年集会等で「スケジュール帳」活用の具体的を提示し、夏休み・冬休み・春休み直前には「しおり」を通して指針を示すなど、時間の自己管理について指導している。 3 9月の学習時間調査前に体育大会や文化活動発表会など2大行事後の生活の見直しを指導している。気が緩みがちな時期であり、1月にも調査を実施し、経過を見る。 4 主体的・対話的で深い学びを学校全体に促し、「学び合い」の導入やICT機器(タブレットを含む)の活用を含め、授業改善に努めてもらうよう呼びかけている。 	
評 価	<p>①C ②C</p> <p>予習や復習について、計画通りに進められようになっている生徒がいる一方、2年生になり理科・社会を本格的に学習するようになると学習時間を増やすだけでなく、今まで以上に効率的に学習することが必要になり、その切り替えがうまくいっていない生徒が多いようである。学習時間の総量を増やすことは大事であるが、効率的で質が向上するような効果的な学習を具体的に指導することが大切である。また、英数国と理社のバランスの取り方についても意識させる必要があると考える。</p>	<p>①B ②A</p> <p>「主体的に授業に参加」については、80%以上の生徒が主体性を持って授業に臨んでいるとなっている。本年度は年度当初から授業が行われ、夏休みの延長はあったものの、「学び合い」の割合は概ね上昇している。近年、「学び合い」の定着により、生徒自身が主体的に授業に参加する意識が向上しているが、今回の結果に満足することなく、次年度に向け、生徒の主体性を引き出す授業の研究を続けていきたい。</p>
学校関係者の意見	<p>保護者からは「子供が精一杯取り組んでいた」「効率的な学習時間の使い方をよく考えていた」等、子供の取り組みを評価する声がある一方、「課題が多すぎて自ら計画した学習ができない」等、心配する声が寄せられた。また、「課題の量より質を高めてほしい」「教科ごとの時間配分バランスをどうすればいいかアドバイスしてほしい」等の要望があった。学校評議員からは「達成目標が生徒の主体性に任せる形になっていてよい」との意見もあるが「今回の質問項目があいまいなため、生徒の捉え方により変動がある」との指摘があった。次年度は質問項目を工夫して実施し、捉えたい事実につくようにすべきとの助言があった。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>学習習慣の定着や効率的な学習がうまくできていない生徒に対して、学習総量を増やし、さらに学力を向上させるための仕掛けを年間を通じて行う粘り強い指導が必要である。予習や復習についても、具体的な教材や取り組み方の例を示すなど工夫が必要であると考えられる。</p> <p>「学び合い」や「ICT機器の活用」の研究を通して、生徒の主体的学習態度を引き出し深い学びに繋がるような授業改善を行っていく。問題点を洗い直し、さらなる授業の改善をおこなってきたい。</p>	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

令和3年度 富山高等学校アクションプラン-2-

重点項目	学校生活	
重点課題	基本的な生活習慣の改善	健康的な環境づくりに努める知識や能力の向上
現 状	<p>本校では『生活あつての学習』を掲げ、規則正しい生活習慣の確立をめざしている。しかし、スマートフォン等を長時間使用し、学習に支障をきたす生徒も見受けられる。また、スマートフォンの利用時間は、最近数年は増加の傾向にある。</p> <p>また、スマートフォンの使用マナーが守れず、「ながらスマホ」で他人に迷惑を掛けたり、自転車に乗りながらスマホを操作し、事故に遭う(起こす)ケースも世間で報じられている。</p> <p>素直で真面目であるが、現実柔軟に対応できず悩みを抱え、高校生活に適応しづらくなっている生徒がいる。学習への精神的圧迫から1年2学期から2年1学期にかけて不登校気味になる生徒も見受けられる。</p>	<p>新型コロナウイルス感染拡大防止は、喫緊の課題である。感染拡大防止対策の一環として換気が推奨されており、日々実践しているところではあるが、換気の状態を正確にとらえることは難しく、換気がおろそかになってしまふことも見受けられる。室内の二酸化炭素濃度を測定し換気の状態を認識し、十分に換気をすることが出来るようになることが必要である。</p>
達成目標	<p>①スマートフォンの、学習活動・生徒間連絡利用以外の使用時間短縮</p> <p>②個人情報のSNSへの安易な書き込みの防止。</p> <p>③「ながらスマホ」の危険性を認識し、自己の行動抑制に努める。</p> <p>④午後11時から翌朝7時までスマートフォン使用しない(イレブンセブン運動守っている)生徒割合が70%以上。</p> <p>⑤ネットパトロール等外部から指摘を受けるような他人の個人情報掲載、著作権違反、他への中傷記載などをなくす。</p> <p>⑥自転車運転中のスマホ使用をなくす。</p>	<p>環境整備委員、保健委員が中心となり、室内の二酸化炭素濃度を測定し、出来れば1000ppm、多くても1500ppmの濃度を下回るように、換気を徹底させる。</p>
方 策	<p>1. スマートフォンは学習活動・生徒間連絡に不可欠なものとなりつつあるが、生徒に対して講演会を実施するほか、教員・保護者が連携して生徒の現状把握に努め、使用時間を控えさせる。</p> <p>2. 個人情報の安易な開示・書き込みなどについての危険性について生徒の意識向上を図る。</p> <p>3. 「ながらスマホ」の事故例などを知らせ、その危険性を認識させ、自分の行動を見直すように呼びかける。</p>	<p>二酸化炭素濃度測定器を教室に配置し、環境整備委員、保健委員を中心に教室内の二酸化炭素濃度を記録する。換気することで教室内の二酸化炭素濃度が低下することを実感し、換気の習慣を確立する。二酸化炭素濃度と眠気の関係や作業効率への影響を知り、感染拡大防止とともに、より良い学習環境について学ぶ。</p>
達成度	<p>①午後11時から翌朝7時までスマートフォンを使用していない生徒の割合 1年…35% 2年…29% 計…32%</p> <p>②ネットパトロール等外部機関からの指摘2件。</p> <p>③自転車運転中にスマホを使用した生徒の割合 1年…3% 2年…5% 計…4%</p>	<p>二酸化炭素モニターの導入により60%の生徒に換気への意識向上が見られた。オートディスベンサーの導入により85%の生徒がアルコール消毒の頻度が高まった。教室内の二酸化炭素濃度が2000ppmを超えることもあったが、適切に対応することが出来た。</p>
具体的な取組状況	<p>新入生保護者に対しては、入学式後の保護者説明会で注意を呼びかけた。新入生に対しては警察の方を講師に招き、SNS安全教室を開催した。</p> <p>また、全校集会や学年集会等で注意を呼びかけ、意識の高揚を促した。</p>	<p>二酸化炭素モニター・オートディスベンサーを各教室、選択教室等に導入した。10月下旬～11月上旬に意識調査を行い、学校保健委員会で報告し、指導助言を受けた。</p>
評 価	<p>① C ② C ③ C</p> <p>①、③は前年度の比較データがないので、増減は判定しがたい。就寝直前や起床直後にメール等をチェックする習慣が多くの高校生にあり、イレブンセブン運動を固守させるのは難しそうだが、改善させたい。自転車運転中のスマートフォンの使用は、事故の原因にもなる危険な行為である。一部の生徒に認識の甘さが見られる。</p> <p>②軽微な指摘が2件あったが、個人情報書き込みの危険性は生徒に浸透しつつあると思われる。</p>	<p>C</p> <p>換気への意識向上、手指消毒の頻度の向上は見られたが、感染力の強い変異株の出現もあり、また感染拡大予防対策には完璧というものはないので、現状維持の評価とした。引き続き感染拡大予防対策を続けなければならない。</p>
学校関係者の意見	<p>保護者より「スマートフォンに時間を支配されている」という声がある一方、「学習にスマホは不可欠になっている」「オンライン授業等スマホ等の使用機会は増加している」「オンラインで子供同士の勉強会をしている」等、スマホとの付き合い方を親も一緒になって考えるべきとの意見もあった。スマホの使い方もコロナ禍で変化してきており、生徒がどのように思っているかを話せるような場や関係性を作ることが大切であるとの助言があった。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>スマートフォンの使用頻度が年々増加している現状の中で、適切な使用方法を生徒一人一人に考えさせたい。</p> <p>成人年齢引き下げに伴い、例えば契約上のトラブルなど、今までにない事案も起こりうる可能性があるため、情報の収集に努めたい。</p>	<p>コロナ禍の現状では、マスクの着用は必要不可欠であるが、コミュニケーションの観点からは、多くの問題を含んでいると考えられる。現状では感染拡大予防対策を優先することは当然であるが、アフターコロナ後に発生するであろう問題点についても、予測し対応策の検討が必要であると思われる。</p>

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

重点項目	進路支援	
重点課題	生徒一人ひとりの適性や能力を引き出す学習・進路指導	
現 状	1 進路目標の達成に向け、自主的で意欲的な学習に結びついていない生徒が多くなっている。 2 一人ひとりの生徒に応じた進路支援を行うよう努めているが、生徒自らが自己の適性や能力を十分に考えて進路目標を定めているとは言いがたく、自己を過大あるいは過小に評価した進路目標を設定してしまう生徒が見られる。 3 日々の学校生活に追われ、学習内容の見直しが十分にできていない生徒が多く見られる。	
達成目標	①「学習・生活習慣の確立」 ・校内で実施している定期テスト、課題テストおよび実力テストの見直し(振り返り)の徹底	②「進路目標(志望校)の設定」 ・目標とすべき志望校が、第2学年で決定している。
	1 学年集会や面談等を利用して、定期テスト、課題テストおよび校内テストを見直すことの大切さを理解させ、学年担当者だけでなく、教科担当者からも生徒が見直すような働きかけをする。 2 三点固定を意識した規則正しい生活を送り、学習習慣が定着するように、「スケジュール帳」やそれに準ずるものを積極的に活用させる。 3 高い進路目標を持つ集団を、補講や大学志望別集会などを通じて早期に形成させ、お互いに切磋琢磨できる環境を学校生活のさまざまな場面で育成するように努める。 4 学年集会や講演会、「進路のしおり」等を通して、生徒にとって必要かつ有意義な情報の提供ができるように努める。 5 「キャリア・パスポート」の作成およびその活用や、社会人や大学生を招いたキャリア教育により、主体的に「学びに向かう力」を育むことができるように支援する。	
方 策	8月と1月に「学習に関するアンケート」を実施。3年生については8月のみの実施とした。結果については以下の通りである。 ・1学年:校内実力テストでの振り返り学習について、ほぼ全教科を見直したと回答した生徒は、6月(59%)→1月(52%)、校外模試では6月(23%)→1月(31%)という結果であった。また一番見直しを行った教科として2回とも「数学」(73%)であった。 ・2学年:校内実力テストは、ほぼ全教科を見直したと回答した生徒は、6月(30%)→1月(25%)、校外模試では6月(29%)→1月(23%)という結果であった。また一番見直しを行った教科として2回とも「数学」であった。 ・3学年:校内模試ではほぼ全教科を見直したと回答した生徒は30%、校外模試では36%、振り返りをもっとも行った上位3教科は、「国語(31%)」「地歴・公民(20%)」と「理科(38%)」であった。「振り返り」学習の効果について、3学年とも95%以上がその必要性を感じていると回答した。	
達成度	令和4年1月末現在、志望校が決定している生徒が30%、ほぼ決定している生徒が51%であった。	
具体的な取組状況	担任による面接指導や学年集会等で、学習の見直し(振り返り)についての必要性和重要性を伝えた。	年間を通して、学年や担任との定期的な面談指導を実施した。特に、難関大学以上を目指す生徒には、添削指導や学習会を実施するなど学習指導だけでなく、生徒が連帯感を持って取り組むことができる環境作りを努めた。
評 価	C	B
	学習の振り返りの必要性は、アンケートから一部の教科まで見直しをしたという生徒まで含めると、全学年とも9割以上が実施していると回答したことから、このアクションプランの1つの目標は達成できた。しかし、どのように取り組ませるかには継続課題である。困難点として、学習量や多忙を理由に時間がないと多くの生徒が回答していることから、3年間の学習計画を再検討し、改善する必要がある。	高い学習目標の設定を推奨しており、8割以上の生徒がその目標達成に向け努力している。今後は、現在の目標校を「受験校」に、そして、合格できるように自主的で意欲的な学習態度が身につくように支援したい。2割の生徒が現時点で未定と回答していることから、その生徒には面接指導などを通してできるかぎり早く目標校が設定できるよう支援したい。
学校関係者の意見	保護者より「スケジュール帳の活用と三点固定の指導は必要」の意見もあるが、「自分の使用しやすいものを使っている」「スケジュール管理は必要なことだが、スマホでもよい」等の意見もあった。「進路目標の設定」については、1年次より進路について考える機会が多くあり、目標設定や意欲につながっている等の意見をいただいた。学校評議員より、計画的にできない生徒の指導や、計画の大切さを面談等を通して伝えていく必要があるとの助言を受けた。	
次年度へ向けての課題	来年度は、一部の校外テストについては見直しを行う予定である。また、来年度から実施される55分授業や、それに伴う放課後の有効活用について検討していきたい。 振り返り学習の調査は、来年度以降も引き続き実施し、生徒が抱えている困難や問題を教職員間で共有し、生徒に還元できるようにスピード感を持って取り組みたい。	現在の志望校が受験校に、そして合格校となる学習支援が必要である。1月に実施された2回目の「大学入学共通テスト」では、「応用的思考力」を問う問題が昨年度よりも多く出題された。教師は、従来の学習指導だけではなく、授業改善や長期的見直しをもった指導が必要である。 今年度は、外部から講師を招き、英語、数学の学習支援講座を実施した。生徒の学習意欲を喚起する講座を今後も検討したい。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

令和3年度 富山高等学校アクションプラン4-

重点項目	特別活動の充実	
重点課題	①学校行事への主体的な取り組み	②3年次における部活動から学習への切り替え
現 状	学校行事は生徒が主体的に企画し、運営を行うことが基本である。しかし、教師が主導的な立場となって立案し、生徒が下請けのような場面が多く見られ、また実際にそのように感じている生徒も少なくない。本校では生徒中心の運営がほぼ定着してきているとはいえ、まだ不十分である。コロナ禍の中、多くの人数が集う行事が多く、実施には過去の実践例に縛られない多くの創意工夫が必要である。しかしこのような状況下での実践こそ生徒の思考力・判断力が育つ主体的な学びの場であると捉え、さらなる進捗をはかりたい。また、3年生は8割強の生徒が部活動に所属することから、部活動に参加することが、より良い学校生活や進路選択につながるように支援していきたい。	
達成目標	1.本校の二大学校行事(体育大会、文化活動発表会)で自ら主体的に運営できたと感じる生徒が80%以上。充実していたと感じる生徒が80%以上。	2.部活動の引退後、1ヶ月以内に進路選択の為の学習に切り替えられる生徒が90%以上。
方 策	1 年間における特活行事の時期・目的・内容等の検討を行う。 2 主な学校行事(体育大会、文化活動発表会、)に対して以下の項目を中心にアンケートを実施する。 ①生徒が主体的に企画し運営できていたか。②この行事は充実していたか。③その他意見 3 部活動の引退後、早期に進路の決定に向けて意欲的に取り組むことができたかアンケートを取り、指導に役立てる。	
達成度	体育大会・文化活動発表会がともに中止となったためアンケートは実施していない。 ただし、生徒会や実行委員会は前年を踏襲することができない中で工夫し計画した。 コロナ禍であったために、生徒が自ら考え、実践するという達成目標が図らずも達成する形になった。	学習への切り替えについてのアンケート結果は以下の通り。 気持ちを切り替えることができた …… 62.3% 気持ちを切り替えることができなかった… 10.2% 部活動と学習に関係性は感じていない… 27.5% 昨年度(R2)は高校総体が中止(代替え大会)になり、気持ちの切り替えができずにいる生徒が多く見られたが、今年度その数は減少した。
具体的な取組状況	体育大会実行委員・生徒会執行部がそれぞれ工夫して企画立案した。体育大会については後輩に継承するための動画を撮影し、また実行委員会は競技解説の動画も考えて撮影した。	生徒たちは、うまく気持ちを切り替えて学習に取り組めていたように思われる。
評 価	C 一部の生徒に運営が集中、また教員や一般生徒に活動が見えにくいという点は解決できなかった。生徒総会で解説行うなどの工夫が必要である。	A 大会が軒並み中止や代替え大会になった昨年度と違い、今年度は多くの生徒が受験に向けて気持ちを切り替えていた。
学校関係者の意見	保護者より「様々な制約の中でできることをしてもらい感謝している」「中止になったが、自分たちが行ってきたことを発表する機会を作ってもらい、満足していた」「体育大会・文化活動発表会の行事が中止となり残念だった」との声があった。また、「行事は縮小してもいいが実施してほしい」「一部の生徒主導にならないよう配慮してほしい」等の意見もあった。「部活動からの切り替え」については、「昨年に比べ、多くの競技で大会の実施もされ、うまく切り替えができた」の声が多くあった。	
次年度へ向けての課題	コロナ禍で行事の実施には、様々な工夫が必要になっている。そして実施方法が前年までと大きく変化する中で、変更の意図・目的が生徒会執行部や実行委員会以外の一般生徒にうまく伝わらなくなったことが増えた。生徒会活動の「見える化」には意思の疎通が必要である。その為に生徒総会や新たな意思疎通の場を作り出し、全校生徒で行事を作り上げているという実感を感じられるような体制にしていかなければならない。	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

重点項目	科学教育の推進																																													
重点課題	科学的思考力の習得																																													
現 状	めまぐるしく変化する現代においては「知識が豊富であること」だけでは対応できなくなっている。「知識」を「知恵」に変えて生きていくためには、「自ら課題を設定し、論理的に思考し、問題を解決する力」が必要となる。それらを育む効果的な教育課程が求められている。																																													
達成目標	①[課題発見力・論理的思考力の育成]	②[意欲的学習態度の育成]																																												
	※「ポスターセッション自己評価」 上記自己評価を実施し、「批判的」「協働的」「創造的」思考力の育成・確認を行う。	※「意欲(興味・関心・意欲)調査」 上記調査を実施し、「探究力」や「論理的思考力」を育成する学習に意欲的に取り組んでいるか確認する。																																												
方 策	1. 「探究基礎Ⅰ」「探究基礎Ⅱ」の指導内容・指導方法を十分研究し、その教育課程について授業担当者の共通理解と密接な連携のもとに実施する。 2. 単元ごとの自己評価に基づき、生徒自らより高い目標を設定し主体的に学習に取り組むことで、高い学力を形成できるよう指導する。また生徒の将来に必要な力を育むための教育課程であることを自覚させ、意欲的に取り組ませる。 3. 巡検研修を「探究基礎Ⅰ」と、東京方面研修を「探究基礎Ⅱ」と効果的に連携させ、探究活動をより深められるよう実施する。 4. 「探究力」や「論理的思考力」を育成する学習を、1・2年普通科「総合的な探究の時間」の指導にも取り入れる。																																													
達成度	2年12月「批判的」「協働的」「創造的」思考力の観点をふまえた自己評価結果。つぎのような思考力をもって活動できるようになったか。 <段階4: できるようになった。3: 少しでもできるようになった。2: あまりできるようになっていない。1: できるようになっていない。>単位% <table border="1"> <tr> <td></td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>3以上</td> </tr> <tr> <td>①批判的思考力</td> <td>37.8</td> <td>54.1</td> <td>6.8</td> <td>1.4</td> <td>91.9(87.5)</td> </tr> <tr> <td>②協働的思考力</td> <td>58.1</td> <td>33.8</td> <td>5.4</td> <td>2.7</td> <td>91.9(93.8)</td> </tr> <tr> <td>③創造的思考力</td> <td>45.9</td> <td>47.3</td> <td>5.4</td> <td>1.4</td> <td>93.2(91.3)</td> </tr> </table> ()は昨年度		4	3	2	1	3以上	①批判的思考力	37.8	54.1	6.8	1.4	91.9(87.5)	②協働的思考力	58.1	33.8	5.4	2.7	91.9(93.8)	③創造的思考力	45.9	47.3	5.4	1.4	93.2(91.3)	1年12月「意欲(興味・関心・意欲)調査(3段階評価)」の実施結果 <段階3: よくできるようになった。2: できるようになった。1: 変わらない割合> 「検証のための調査や実験に興味をもって行った。」単位% <table border="1"> <tr> <td></td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>2以上</td> </tr> <tr> <td></td> <td>45.7</td> <td>49.4</td> <td>4.9</td> <td>95.1(98.7)</td> </tr> </table> 「仮説とその検証方法について意欲的に考えた」 <table border="1"> <tr> <td></td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>40.5</td> <td>53.2</td> <td>6.3</td> <td>93.7(97.4)</td> </tr> </table> ()は昨年度		3	2	1	2以上		45.7	49.4	4.9	95.1(98.7)		3	2	1			40.5	53.2	6.3	93.7(97.4)
	4	3	2	1	3以上																																									
①批判的思考力	37.8	54.1	6.8	1.4	91.9(87.5)																																									
②協働的思考力	58.1	33.8	5.4	2.7	91.9(93.8)																																									
③創造的思考力	45.9	47.3	5.4	1.4	93.2(91.3)																																									
	3	2	1	2以上																																										
	45.7	49.4	4.9	95.1(98.7)																																										
	3	2	1																																											
	40.5	53.2	6.3	93.7(97.4)																																										
具体的な取組状況	【探究科学科1年】 4～5月に、「論理的に考えることとはどのようなことか」というコンセプトのもと、教材を用いて学習を重ねた。 6～7月に、人文社会科学科は、郷土博物館から講師を招き神通川越線工事について講義を受けた。また富山市内でフィールドワークを行い、富山市の治水と市街地の形成の歴史と現状を学んだ。(巡検研修) 7月に理数科学科は、KAGRA、カムランド、飛騨天文台などから講師を招き、最先端の研究に関して講義を受ける。(巡検研修の代替)。また立山カルデラ博物館の研究員とともに立山室堂・弥陀ヶ原でフィールドワークを行いカルルなどの氷河地形や池塘など国立公園内の貴重な環境を学んだ。 9月の文化活動発表会は中止となったが、発表会に向けて班に分かれ課題研究に取り組み、その成果を12月に科内ポスターセッションで発表した。同時期に、2年生主体の三校合同課題研究発表会に参加し、レベルの高い発表を聞くことで経験を積み次年度の参考とした。 1月に「サイエンスダイアログ」を実施し、大学や研究機関で活躍している若手外国人研究者から、英語で研究の話聞く経験を通して、研究活動に対する関心・意欲を高めた。 【探究科学科2年生】 4月より各班の計画に従い、探究活動を行った。富山大学教官による指導助言を受け、課題研究テーマの方向性について調整を図った。 9月の文化活動発表会が中止となり研究活動に遅れがでたが、11月に中間発表会を行い急仕上げではあるものの発表内容をまとめた。その後さらに検討を加え、12月の三校合同発表会でポスターセッション形式のプレゼンテーションを行った。 3学期は、これまで行った発表を研究集録に残すための作業を行い、2月には科内発表会を開き、互いに質問や意見交換をする中で内容を深め、探究活動を締めくくった。 【普通科1・2年】 1学期に「論理的思考力」を育成する学習を4時間実施した。その結果、文化活動発表会では、「仮説をたてて、検証を試みる」という手順を含む内容が、定着してきている。																																													
評 価	A	A																																												
	昨年同様に例年より研究期間が短く心配されたが、その分集中して研究に取り組んだ生徒が多く、ポスターセッションによる発表に対し達成感を感じた割合も高かった。しかし、そうでない生徒も少数ながらおり、「批判的」「協働的」「創造的」思考力の観点を意識しながら課題研究に取り組ませる工夫が必要であると考える。	探究活動に意欲的に取り組んでいると思われるが、「調査や実験に興味をもって取り組んだ」「仮説をたてての検証」の「段階3:よくできるようになった」の割合がまだ低めなので、更なる創意工夫が必要だと考える。																																												
学校関係者の意見	「課題発見力・論理的思考力の育成」について保護者より、「科学的思考力の習得等を普通科にも取り入れてほしい」「昨年に比べ、活動も増え、科内発表会は楽しんでた」等の意見があった。学校評議員からは「課題発見力・論理的思考力の育成」の「批判的思考力」の育成は難しいが、将来、必要とされる力である。富山高校の生徒はおとなしい印象だが、探究活動でやり取りした質問や返答を通して「批判的思考力」を育成してもらいたいとの助言があった。																																													
次年度へ向けての課題	「探究Ⅰ」では、7月に巡検研修を行った。理数は研究所・天文台から講師を招き講義を受けたが、やはり実際に施設を見学し様々な体験をさせたい。立山室堂・弥陀ヶ原での研修は代替研修としてはまずまず充実したものとなった。人文は富山市内でフィールドワークを行い、実際に町中で種々の施設の見学・観察を行ったことは良かったと思われる。これらの巡検研修を通して理数科学科・人文社会科学科ともに様々な課題に対してのアプローチの仕方を学んだ。今後も2年次の課題研究にスムーズにつながるような計画になるよう検討していきたい。 「探究Ⅱ」では東京研修が中止となり、代替プログラムを実施した。ただ、実際に施設を訪問するより驚き・発見は少ないことは否めない。次年度においては研修を実施したいが、代替プログラムとなった場合もさらに内容を充実したものにした。また、課題研究においては、9月に休校期間が入り文活が中止となった関係で研究にかなりの遅れがでてしまった。立案をしつかり行い、より効果を得られるような工夫を継続的に行っていく必要がある。																																													